

夢窓幼稚園通信第58号

2016年11月30日

おすましに柚子の皮のほんの小さな一片が加わると、その香りで美味しさがふくらみます。

頂戴した柚子をごちそうでいただくばかりでなく、お風呂に浮かべてはいるとゆったりほかほか最高です。昔小さかった我が子とゆず風呂にはいったとき、「みかんさんもお風呂がすきな?」って!

「今が旬」の食材や出来事は、大いなる賜りもの…幸せをも届けられます。

上旬、下旬の「旬」ですから、それは十日毎の時間の区切りを指しますが、古い時代朝廷では各旬の初日に天皇が政を臣下の者たちから聞き、ねぎらいのごちそうや物品を与える儀式をもっていたそうです。「旬のもの」もそこからきているのかもしれませんが、後の世にそのセレモニーは春と秋、そして冬至の頃に限られるようになったそうですから、おひさまの力が弱まるこの冬至、そしてクリスマスの時期は、洋の東西を同じくして特別に意味深く受けとめられてきたのですね。

暗く寒くなる季節には、明るさと温まるものが欲しくなりますが、これからの旬のもの＝時に適ったものは、ですから人の心と体を明るく温めてくれる賜りものであるのに違いありません。

一年でいちばん夜が長い季節に、太陽から神の子であるキリスト存在となるイエスが地上にやってきたのは、まさしくそういう意味なのでしょう。

闇に光が与えられたのです。

寒い季節になっても、子どもたちは変わらず元気に砂でごちそうを作ったり、穴を掘ったり、水を運んで…遊んでいます。

光という賜りものを与えられ、それを受けとった私たちが、「私とて生きる」ことで大いなる生命の世界にお返しをし、そして次の「時」の創造に加わるのだとするなら、子どもたちは遊ぶことを通して

まさしく …

そのような行為に没頭し専念して生きているのでしょう。
子どもたちは土も水も、風も光も、そしてそれらの方によって
育まれている自然たちを、賜りものとして何でも興味を示し
遊んでしまいます。

その姿は、自らを生き、周囲にいのちの輝きを知らせ、
未来の時を予感させます。

それぞれの季節の賜りものとしての旬のものは、マツタケや
サンマ … など伝統的なものばかりでなく、子どもたちが
示してくれているように、もしかしたら「私」がよるこびの中で
受けとるもの、「私」が感謝して受けとるときにその存在の意味
があらためて生じてくる あらゆるものなのかもしれません。
世界の中の存在たちを、私が「私のこととして」受けとめる
とき、それらの存在の「今の時」が輝き、旬となるような
気がするのです。

クリスマスに向かう私たちが、それを2000年前の出来事として
ばかりでなく、今の「私のこととして」感じるときに、そのいのち
ある意味があらたに輝くのでしょう。

そして私自身も、内に光と温かさを実感できるのだと思います。
賜りものは、与えられたことに意味があるのではなく、受けとった
「私」が内的な作業を通して、それを輝きあるものにするかが
問題なのですね。

クリスマスは それを集中して体験することなのだと思っています。

今年のクリスマス、そして冬至を祝福をもって迎えられることを
願っています。

2016.11.30

園長 升光 泰雄